

に分離同定された。

以上の実験事実、インドールアミン酸素添加酵素が霊長類（アカゲザル）に存在し、インドールアミンの代謝及び生理機能発現に関与している可能性を示唆する。

#### 実験室環境下（温度 22°C、湿度 62-77%） におけるニホンザルの摂食量および摂水量<sup>1)</sup>

大野 拓夫（愛媛大・医）

一定温度 22°C、相対湿度 62% および 77%、12 時間人工明暗交代の環境条件のもとで、個室ケージに飼育された 4 頭の雄の成熟ニホンザル（平均体重 12.0kg）の摂食量と摂水量を測定した。摂食量、摂水量は個体差が大きかった。相対湿度の変化に対して摂食量には有意の差がなかったが、摂水量は、相対湿度 77% の時、62% の時より有意に大きかった。

#### 霊長目におけるサイロキシン結合蛋白質の進化に関する研究<sup>2)</sup>

田名部雄一（岐阜大・農）

霊長目に属するいろいろの種について、その進化の道程、相互の近縁関係を探るため、サイロキシン結合プレアルブミン (TBPA)、およびサイロキシン結合グロブリン (TBG)、について調べ、TBPA については多型現象における遺伝子頻度、TBG ではサイロキシン結合能を調べた。

1. 現在まで通算 1810 個体のヒトおよびサルから血漿を採取し、<sup>125</sup>I 標識サイロキシンを混和した後アガロースゲル電気泳動を行ない、エックス線フィルムをあてて、オートラジオグラムにより、TBPA の存在と型を決定した。比較的多くの個体数が得られたのは、ニホンザル 1092、ヤクザル 149、アカゲザル 219、カニクイザル 73、ヒト 71 などである。この結果、TBPA は狭鼻猿類にのみ存在し、多型はオナガザル上科 (Cercopithecoids) にのみ存在する事がわかった。ヒト上科 (Hominoid) はすべて F 型に固定している。オナガザル上科に属する種は一般に PA<sup>F</sup> の遺伝子頻度が高いが、ニホンザル、ヤクザルは PA<sup>S</sup> に固定されていた。

2. ヒト、フクロテナガザル、マントヒヒ、ニホンザル、アカゲザル、リスザル、ヨザル、ツバイについて、各々 5~10 個体を用いて、TBG および TBPA のサイロキシン最大結合能を調べた。TBPA はオマキザル上科、原猿類ではなく、狭鼻猿類の種にのみ存在するが、最大

結合能はアカゲザル 174 μg/dl、ヒト 164 μg/dl で種間、上科間に大きな差は認められなかった。TBG はすべての霊長目の種に存在したが、リスザル、ヨザルは殆ど 0 に近く、アカゲザルは 51 μg/dl、フクロテナガザル 52 μg/dl、ヒト 43 μg/dl で狭鼻猿類に属する種では大きな差はなかった。

#### ニホンザル個体群の環境に及ぼす人類の攻撃作用について

千葉徳爾（筑波大学歴史・人類学系）

今回は狩猟者の直接捕獲行為とその目的にしばって、全国各地の主要類型を整理した。

- 1) 九州・四国及び中国山地では、狩猟者は単独行動をとり、少なくとも表面的にはサルをとると祟りがあるとして、捕獲しない。祟りの種類は不具・火災が主である。しかし、辺境部ではひそかに捕って主として薬用に売る者があつたらしい。
- 2) 紀伊半島から中部日本の山地でも単独狩猟者がほとんどで、表面的にはサルの捕獲を好まないが、禁忌の重点は一匹狼をとらぬことであり、集団についてはさほど禁忌がないのみならず、これを薬用に供するため主要な仕事にしていた者がおり、そのため絶滅したニホンザルグループもある。薬用の主目的は頭部の黒焼であった。
- 3) 日光山地から上越・会津方面の狩猟は、かつて共同であつたらしく、現在もその残片と思われるサル捕り仲間の形式が残っている。犬を使用するものと使用しないものがあるが、犬を用いる形式が古いらしい。禁忌としては、自己が縁ある動物（干支・信仰など）を捕らぬという場合、中年だからサルをうたぬという以外に、ほとんど捕獲を忌むことはない。捕獲目的は頭部の黒焼を薬用とすることにある。
- 4) 山形・秋田・岩手などのいわゆるマタギ仲間には、サルヤマを寒中の共同狩猟として実施し、犬を使用し全く禁忌をもたない。捕獲目的は熊の胆と同様にサルの胆を利用し、また頭部を牛馬の厩の守護神として販売すること、さらに胎児を婦女の産後の薬に売るにあつた。一部にサルは人語を解するから捕獲時には通常の用語と逆に、発見した場合「サル居ないぞな」と言う慣行もあるが、その発生は新しいようである。
- 5) 以上のように、南西日本から東北日本にかけて、現行の狩猟者のサルに対する攻撃方法や目的に差異が認められる理由は、主として西南日本で近世何等かの宗教者の勧説が行われた結果で、同時に現在ニホンザル個体群の存在形態に、ある程度の作用を与えているものと判定される。しかしながら、その詳細は今後の解明にまたねばならない。

- 1) 加藤良夫（京大・霊長研）、登倉尋実（奈良女大家政）との共同研究。
- 2) Tanabe, Y., M. Ogawa and K. Nozawa; (1974): Polymorphism of thyroxine-binding prealbumin (TBPA) in primates species. Japan. J. Genetics. 49 (5) 265-273.

6) 付加するならば、本州最北端の青森地方にニホンザルが残存し得た理由の一端は、この地区におけるマタギ活動が、羚羊・熊に集中し、しかもその時期が近世末になってはじまったことと関連するらしい。

### 霊長類の培養細胞における突然変異の研究

平井 百樹 (放射線医学総合研)

霊長類の細胞レベルでの各種表現型や突然変異を研究するためには、細胞を常に良好な培養条件下で維持していくことがまず第一に必要である。染色体研究の場合、末梢血を用いると採血後数日のうちに調べなければならぬのに対し、線維芽細胞などの培養細胞を用いれば必要な量の細胞を常に用意することが可能である。1969年アメリカのヤーキース研究所で発見された染色体トリソミーのチンパンジーは生後17ヶ月で死亡してしまったが、その腎臓細胞は培養され凍結保存されていた。1974年になって、この細胞を用いてキナクリンなどの染色体分染法による染色体同定が行われ、第22番染色体のトリソミーであることが判明した。これなどは培養細胞を利用したよい例であろう。

本研究は、細胞レベルでの各種表現型や突然変異を研究するうえで基礎的段階となる細胞の継代維持を目的とした。現在以下の細胞系を培養している。

|              |       |             |
|--------------|-------|-------------|
| ヒト女性肺由来      | WI-38 | (染色体モード 46) |
| ヒトリンパ球       | Bri-8 | (四倍性)       |
| カニクイザル腎細胞    |       | (42)        |
| ニホンザル皮膚      |       | (42)        |
| アフリカミドリザル腎細胞 |       | (四倍性)       |
| マウス腎細胞       |       | (40)        |

これらの細胞の一部は、よく増殖している段階で凍結保存(-70°C)し、必要に応じて融解して培養に移している。各細胞系について定期的に染色体構成を調べているほか、化学薬品を培養液に加え各種染色体異常の出現頻度を調べている。次の段階として、細胞周期の比較、薬品耐性をはじめとする突然変異株の確立、細胞雑種によるマッピングなどの研究が可能となった。

### サル の 覚 醒 水 準 の 変 動 と 漸 増 反 応 (recruiting response) の 関 係 に つ い て

中村 圭佐 (福井大・教)

#### 目 的

無麻酔、慢性条件下のサルにおいて、覚醒水準の異なる諸状態で視床諸核を低頻度電気刺激し、皮質および視床諸核に誘発される反応 (いわゆる recruiting response, augmenting response) を記録し、その波形分析から、汎性視床投射系における視床諸核の機能および皮質諸部位との関係を検討した。

#### 方 法

視床核 (正中中心核 n. CM, 外側中心核 n. CL, 背内側核 n. MD, 前腹側核 n. VA, 網様核 n. Rt) には同芯円電極を、皮質12部位 (左右の前頭前野運動, 前野運動野, 感覚野, 頭頂連合野) には硬膜上にネジ電極あるいは銀球電極をそれぞれ植え込んだアカゲザル2頭を用いた。

記録は無麻酔で、モンキーチェアに固定した状態で、主として夜間に経過する覚醒-睡眠の諸状態につき計27回にわたり行ない、脳波計上に紙記録し、あわせて磁気記録した。

刺激はパルス幅0.5msecの矩形波、頻度は8Hzとした。波形の分析は平均加算反応波形および個々の波形変動について行なった。

#### 結 果

平均加算反応波形において、長潜時陰性成分を主要成分とする漸増反応が n. CM, n. CL, n. Rt 刺激について認められたが、n. MD, n. VA 刺激による反応波形はより速い陰性成分を示し、とくに n. MD 刺激では顕著であり、遅い陰性成分を伴って複雑な波形構成を示した。

徐波睡眠時の反応波形は長潜時陰性成分の振幅の増大を特徴とし、n. MD 刺激においても遅い成分が主要な成分となった。

刺激部位により反応波形の皮質上の分布は異なり視床諸核と皮質各部位との関連が示唆された。n. CM では運動前野を中心に運動, 感覚野に、n. CL では前頭前野から感覚野まで広汎に、n. Rt では運動前野で著明であるが頭頂連合野まで広汎に出現した。n. MD, n. VA では前頭前野において明瞭な反応が見られ、その他の部位ではむしろ不明瞭な波形を示した。

### DRLL スケジュールを用いた霊長類の計時行動の研究<sup>1)</sup>

伊藤 正人 (慶大・文)

目的: ニホンザルの計時 (temporal discrimination) 行動を他の種のデータと比較するために、見本時間付長潜時分化強化 (differential reinforcement of long latency with a sample duration: DRLLS と略) スケジュールを用いた実験場面を設定した。

被験体: 小豆島産雄のニホンザル (*Macaca f. fuscata*) 2頭 (S-1, S-40)。

装置: 左右2個の反応パネル及び中央下部にレバーの付いた実験ボックス。刺激の呈示, 反応潜時の記録等はすべて PDP8/F ミニコンピュータで行なった。

手続き: 最初に中央のレバー押し反応を形成し、続い

1) 浅野俊夫 (京大・霊長研) との共同研究